

<書評と紹介> 木村涼著 『七代目市川團十郎 の史的研究』

KAWAKAMI, Mari / 川上, 真理

(出版者 / Publisher)

法政大学史学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

法政史学 / 法政史学

(巻 / Volume)

83

(開始ページ / Start Page)

68

(終了ページ / End Page)

72

(発行年 / Year)

2015-03-24

木村 涼 著

『七代目市川團十郎の史的研究』

川上 真理

一 はじめに

本書は、木村涼氏が二〇一一年三月に法政大学大学院人文科学研究科より博士（歴史学）の学位を取得した論文『七代目市川團十郎の社会的的研究』を基礎として、これに修整を加え編集した、著者の最初の論文集である。

かねてより江戸歌舞伎に関心を寄せていた著者は、のちに「市川家中興の祖」と讃えられ、激動の人生を送った七代目團十郎（天保三年三月より五代目海老蔵）に惹かれて研究に着手し、I七代目と観客・最良、II七代目と成田山新勝寺、III七代目と幕府の政策という観点から、江戸社会における七代目の存在意義を考察して、その人物像を浮き彫りにしてきた。（あとがきより）

日本演劇と日本近世史とに跨る著者の研究は、着眼点の良さと、何と言っても歌舞伎に対する情熱とに牽引されたものであることは言うまでもない。徹底して江戸歌舞伎に寄り添ったその姿勢は、左に示す全一〇章の構成をみれば明らかであり、日本近世史研究への新しいアプローチを試みたものである。

- 序章 七代目市川團十郎の肖像
- 第一章 歌舞伎・文人と江戸社会
- 第二章 成田山新勝寺と奉納芝居
- 第三章 成田山江戸出開帳と靈驗記上演
- 第四章 成田山額堂寄進と扁額奉納
- 第五章 成田山仁王門再建と勸進興行
- 第六章 風俗取締政策と歌舞伎十八番「景清」
- 第七章 成田山蛸居と「しもふさ身旅喰」
- 第八章 五代目海老蔵の救免と「景清」
- 終章 本書の成果と課題

二 本書の概要

まず、本書の概要を紹介する。序章では、研究史整理と分析視角および課題の提示がなされている。歌舞伎を楽しむことを観客の「心性が求める遊び」と捉え、遊びとは秩序を生み出す文化機構という観点に立ち、「従来の歌舞伎研究には、こうした新たに出現する秩序を明確にするという視点が欠如しており、ただ歌舞伎を江戸時代の人々の娯楽として位置づける傾向が強かった。しかし、歌舞伎の娯楽性とは何か、人々が歌舞伎に何を求めているのかを明らかにしていく必要がある。」としている。また、七代目を取り上げる理由を、市川家と江戸歌舞伎の発展に大きな功績のあった七代目と、江戸社会との結びつきについての深い考察がなされてこなかったこと、および天保改革期に重罰を受けた七代目と支配権力との関係も本格的に研究されていないこととしている。課

題を、上方歌舞伎役者の観客論・蟲貞の支援形態の研究が展開されているのに比べて、江戸歌舞伎役者のそれに関する十分な研究が進められていないこととし、蟲貞連を中心に創作した出版物や刷り物を検討するとしている。

第一章では、文化・文政期に活躍する七代目團十郎を取り巻く人々の意識・性格と、その蟲貞連の支援形態を検討し、七代目の人気を式亭三馬の『客者評判記』で、蟲貞の素性をみます連の『團十郎七世嫡孫』等で明らかにしている。五代目から続く團十郎の蟲貞は、狂歌師としてペンネームで活動する個人が、團十郎の支援という共通目的の下に身分・職業にとらわれない連を形成したもので、この連が実社会とは異なる新たに形成された平等社会の存在になると論じた。この連を「社会的結合」とし、これが江戸時代の身分制支配秩序を超越した自主的・自立的にして平等な社会集団形成の論理を持っており、こうした社会集団が歌舞伎の世界を支える大きな役割を果たしていたと結論している。

第二章では、文政二年六月、七代目による成田山境内興行の開催手続を検討し、これを実現させるためのネットワークを明らかにしている。成田村を管轄する佐倉藩は、歴代藩主が帰依した成田山での興行開催を、関東取締出役の規制をかくぐる工夫をして実現に結びつけた。成田山本尊不動明王が七代目をはじめ人びとの精神的拠り所であったことで、七代目・成田山・佐倉藩の社会的横断的な結びつきによる協力体制がつくられたのであり、成田山とは不動明王を介して共有の空間が成立する場であったと結論している。

第三章では、文政四年三月、深川永代寺での成田山江戸出開帳に合わせた、中村座での七代目「伊達袿解脱絹川」上演を検討した。これは、成田山不動明王の靈験記を出所としたもので、出開帳の成功は、風邪が大流行する江戸の人びとが不動明王の病調伏の靈験を求めたことによると論じた。そして、この靈験譚が七代目と成田山との結びつきを人びとに強く意識させ、七代目によって成田山と江戸社会との結びつきも強固になったと結論している。

第四章では、先の出開帳中の文政四年五月、七代目の寄進による額堂建立が市川家永統を願う成田山不動明王への信心によるものであったとしたうえで、同時に奉納された七代目蟲貞の狂歌連五側の扁額の構成員を分析し、五側は居住地を同じくする人が多く、身分・職業は異なるも商人が多い傾向があり、またこの一部はみます連とも重複していたことを明らかにした。成田山額堂を團十郎の信心と、團十郎・みます連・五側の水平的・社会的結合の体現と位置づけた。

第五章では、文政七年七月、七代目の二度目の成田山境内興行について、一度目との異同を明らかにした。これは一度目同様の「成田屋七左衛門」が、「土佐踊」「土佐狂言」を開催することで藩から許可されたもので、成田山が依頼した仁王門再建助成のための勧進興行であった。しかし実際には、江戸役者を出演させて歌舞伎狂言が興行されており、佐倉藩・成田山・團十郎の社会的横断的な結びつきを基盤として成立したと論じた。

第六章では、天保十二年の江戸歌舞伎猿若町移転と、翌年の五代目海老蔵（七代目團十郎）江戸十里四方追放について、検挙時に

上演されていた歌舞伎十八番「景清」の演出を社会状況と関連させて解釈した。海老蔵扮する平景清は牢の中で源頼朝の過酷な責めを受け、ついに牢を破って大暴れする。初代歌川国貞の錦絵にも描かれたこの場面は、幕府の厳しい改革に対する社会の不満を擬似的に打ち破る効果をもつて人びとに受け入れられたと論じた。一方で、海老蔵と関わりがあった家主や質屋、芝居道具を調達する古道具屋までもが処罰の対象となり、海老蔵の日常生活・芝居双方の関係者が連座となった事実を明らかにした。人びとの政治に対する不満を発散させる海老蔵の芝居空間は、身分・職業を超越した社会的結合によって、身分制支配秩序とは異質の社会秩序を新たに構築したと結論した。

第七章では、追放を申し渡された海老蔵の成田山での約一年にわたる蟄居生活について、その手記をもとに検討し、和歌や俳諧にみられる芝居に対する思いや、高野山参詣や伊勢古市芝居への出演という、役者の多様な側面を明らかにした。

第八章では、嘉永二・三年、海老蔵の赦免と江戸復帰について、復帰芝居の演出と社会状況に注目し、追放時と同役の平景清の性格・演出形態の相違を明らかにした。天岩戸神話に取材し、景清を天照大神に見立てた芝居は、すでに三代目歌川豊国が錦絵に描き、これを受けて二代目河竹新七が歌舞伎狂言に創作した。海老蔵の江戸芝居への復帰を暗示する場面をクライマックスとして最高潮に達した芝居空間は、海老蔵の捕縛という幕府の公権をもつてしても人々の心を海老蔵から切り離すことが出来なかったと論じた。観客の集合心性にかなう演出をすることは、観客・海老蔵・

浮世絵師・狂言作者などの社会的横断的結合によって構築される身分制支配秩序を超越した新たな社会秩序を形成することにつながるものであり、歌舞伎の意義は集合心性による新たな社会秩序の形成に芝居内容と役者と観客をつなぐ点にあると論じた。

終章では次のように成果と課題を述べている。本書では、従来の作品・芸態論、芸能興行史、制度史・政策史を踏まえつつ、七代目を観客や虫扇を軸とする江戸社会の人々との接点の中で位置づける独自の方法を開拓し、七代目と江戸社会との関係が幕府の身分制支配秩序に規定されない新たに構築された社会秩序を創出したと結論づけた。七代目市川團十郎に関する本格的研究の最初の成果を提示できたとし、さらに地方興行を検討することで七代目の歌舞伎興行の全貌を明らかにすることを課題としている。

三 本書の特色と意義

本書は、身分・職業によって分節化された江戸時代の社会の中で、歌舞伎に関わる人を、場に着目して結びつけ、それを新たな社会像として提示する研究である。「心性」「社会的結合」、演劇装置の解釈といった、従来の日本近世史研究ではどちらかと言えば馴染みの薄い課題にあえて取り組んだ意欲作である。評者は次の二点に注目している。

まず、歌舞伎を支える人びと―観客とくに連、制作者、錦絵作者―への注目である。舞台演出に観客の願望を読み解き、それを増幅させる錦絵を併せて紹介することで、歌舞伎・錦絵の風刺性・メディア性が際立ち、消費者の欲望と創作活動との双方向性―文

化空間／文化の消費―の仕組みが明確になった。

また、連の分析は構成員の身分的・職業的多様性を明らかにした。かつて田中優子氏が天明期の俳諧連・狂歌連について、本書にも登場するみます連を例に論じたときには、構成員は必然的に地縁を基盤とすると述べられていたが（同『江戸の想像力』筑摩書房、一九八六年）、本書では構成員が役者・武士・町人であったことが明らかになった。また、五側の一部がみます連の一部をも成しており、連の構成員が重複することも明らかになった。狂歌師という立場で変名によって身分制度の枠組みを外れて、複数の連に所属する、個人の多面的な活動を捉えている。

次に、時代と社会が俯瞰できる人物史となっている点である。七代目團十郎も歴史上の著名人ではあるが、政治権力の側でない個人に焦点を当て、それに関わる人・場の歴史を政策と関連づけで描いたものであり、個人史から全体史を描く社会史の試みである。一方で、七代目を、彼をめぐる関係からあぶり出すことを目的としており、その活動に沿って年代順に並べられた論考は、彼の一代記の体を成している。七代目に肉迫し、むしろその眼を通して江戸時代の社会や国家を描いても面白かったと思う。

四 若干の疑問

本書に対しては評者も共感する部分が多い。だが、こういった研究の進展に幾ばくかでも寄与できれば幸いと思い、あえて三つの疑問を指摘してみたい。

まず「心性」についてである。例えば第六・八章では、芝居演出

を解釈し、そこからメッセージを抽出して、それが集合心性に浸透していく、もしくは集合心性が呼応すると説明している。著者はあえて「心性」を定義しなかったのかもしれないが、「心性を検討する」というにはやはり、これを定義し、それが何に表象されたのか、あるいはどのような行為に結実したのかを、人びとの主体性に基づいて導く必要があったのではないか。そのためにも、海老蔵の事件のような事例でなくとも演目に心性を解釈することが可能かという観点で、事例が収集されることを期待したい。

次に「社会的結合」についてである。例えば「團十郎と連との水平的・社会的結合」「身分・職業にとられない狂歌師という社会的結合」「團十郎・みます連・五側の水平的・社会的結合」「身分・職業を超えた社会的横断的結合」「観客、海老蔵、浮世絵師、狂言作者などの社会的横断的結合」というように使われており、これは身分・職業に関わらず芝居空間を共有することで成立する関係を指したものと理解される。この概念について著者は、成田龍一氏が「表象としての『社会的結合』」の項で「時々状況の中で関係的に選び取られた上であらわされる結合」と述べた箇所（二宮宏之編『結びあうかたち―ソシアビリティ論の射程』山川出版社、一九九五年）を参照し、水平的結合を強調した。浅学を恥じずに述べれば、この文言には、歴史を叙述する我われが選んだ表象という意味も含まれてはいまいか。本来注目されたのは、自己同一性に関わって日常に生じる関係であり、統合と排除の作用を持つ集団関係を考察する概念としてはなかつたかと考える。「日常性」に注目すれば、狂歌師の連が前提とした筆名という「変身」も、海老蔵の

江戸帰還を暗喩した芝居の「見立て」への共感も、芝居の非日常空間でこそ成立したのではないか。これらの点からは、役者・制作陣・個々の観客が集団存立の条件を共有した事実が確認されるのか、また社会的存在と捉えるならばその結びつきは芝居空間を離れても継続したのか、そして秩序というほどに成熟したものなのか疑問を持った。

最後に、追放された五代目海老蔵が、八代目團十郎の孝子表彰にかこつけて赦免されたことについてである。著者は、海老蔵の復帰を喜ぶ劇場の一体感を、海老蔵捕縛という幕府公権をもってしても観客の心を海老蔵から離すことは出来なかつたことの証左として示した。しかし別の見方からは、追放に至る海老蔵の所業と人びとの反応は、幕藩制秩序のスケープゴートとしての海老蔵をより際立たせており、幕府が再び周辺の存在を取り込んで秩序維持を図つたと捉えることも出来るのではないか。このとき海老蔵は反秩序の象徴となることをどう受け止めたのか、一方人びとは幕府と海老蔵との応酬をどう捉え、どう行動したのか。「社会的結合」は、歴史叙述の後景に押しやられがちな日常性に注目する概念でもあるから（前出、二宮宏之編著、劇場を契機に結びついた人びとの実社会での振る舞いが明らかになれば、著者の主張がより強固なものとなるのではないだろうか。

五 おわりに

以上、評者の浅慮や偏見、理解不足の点は、平に海容を乞う次第である。しかし、本書が目指した、江戸歌舞伎を社会の動きと

ともに捉える試みは、受容者という視点を得たことで十分にその目的を達成している。それと同時に、学際的な史料の活用と史料の空白を埋める解釈は、新しい社会史の試みとして一石を投じている。史料を博搜し、個々の実証は丁寧に成され、しかもいづれの事実も興味深い。また図版も多く掲載され、巻末には「市川團十郎家系図」「七代目市川團十郎略年表」を付し、七代目團十郎の年代記としても読む者を飽きさせない。様々な人に読むことを薦めたい一書である。

(二〇一四年二月刊 A5判 二五〇頁 吉川弘文館 七〇〇〇円 + 税)